

志賀直哉「城の崎にて」の最終稿

——『映山紅』所収「城崎にて」の本文と注解——

日本文学／教授 寺杣 雅人

はじめに

志賀直哉「城の崎にて」の最終稿は、昭和二十一年刊の『映山紅』（全国書房）所収「城崎にて」である。平成十一年刊の最新の『志賀直哉全集』（岩波書店。以下現行全集という。）第三卷所収「城の崎にて」は、この最終稿における修訂を受け入れていない。現行全集所収「城の崎にて」の本文は、昭和十三年時点の本文であり、いわば「城の崎にて」の途中形であった^①。

現行全集の「城の崎にて」は、昭和三十年刊の『志賀直哉全集』（岩波書店。以下新書判全集という。）第二卷所収「城の崎にて」を底本としており^②、さらにこの新書判全集所収「城の崎にて」が底本とした本文は、それはなぜか明らかにされていないのだが、昭和十三年刊の『志賀直哉全集』（改造社。以下九卷本全集という。）第三卷所収「城の崎にて」であると思われる。九卷本全集と新書判全集、そして現行全集の「城の崎にて」は、字句のすべてが一致している^③。

この九卷本全集所収の「城の崎にて」に対して、たとえば語句においては、冒頭の「一人で」（但馬の城崎温泉へ出掛けた）を「一人」とし、散歩中の主人公が目にする「山女」（やまめ）を「鮎」（はや）に変えるなど、二十数箇所におよぶ修訂を加えて成ったのが、昭和十五年刊の『映山紅』（草木屋出版部。以下「映山紅」Aとする。）所収「城崎にて」であり（この時標題の表記も「城の崎にて」から「城崎にて」へと改められている。）、さらに語句や段落分けを見直した後、著者の最後に提示した本文が、昭和二十一年刊の『映山紅』（全国書房。以下「映

山紅」Bとする。）所収「城崎にて」であった。

本稿は、志賀直哉「城の崎にて」の最終稿、昭和二十一年刊の『映山紅』（『映山紅」B）所収「城崎にて」の全本文を示し^④、二つの『映山紅』で出現した段落、文、語句の異同を中心に、「城の崎にて」の完成形に向けて最後に行われた修訂の詳細を明らかにしようとするものである。

一 「城崎にて」——「城の崎にて」の最終稿

昭和二十一年刊の『映山紅』（『映山紅」B）所収「城崎にて」の全本文を以下に示す。『映山紅」AまたはBの本文において動きのあった部分^⑤および著者の本文の形成について考える上で留意すべき部分に波線を引き、通し番号を付した。その破線部についての注解は、次章の「二 注解」に通し番号別に提示している。

「1」城崎にて

山の手線の電車にはね飛ばされて怪我をした、其後養生に、「2」一人、但馬の城崎温泉へ出掛けた。背中^{せなか}の傷が脊椎カリエスになれば致命傷になりかねないが、そんな事はあるまいと醫者に云はれた。二三年で出なければ「3」心配は要らない。兎に角、要心は肝心だからと云はれて、それで来た。三週間以上——我慢出来たら五週間位あるものだとかへて来た。

頭は未だ何んだかはつきりしない。物忘れがはげしくなつた。然し気分は近年になく静まつて、落ちつきたい氣持がしてゐた。稲の穫入れの始まる頃で、氣候も「4」よかつたのだ。

一人きりで誰も話相手はない。讀むか書くか、ぼんやりと部屋の前の椅子に腰かけて山だの往來だのを觀てゐるか、それでなければ散歩で暮らしてゐた。散歩する所は町から「5」小い流れについて少しづつ登りになつた路に、いい所があつた。山の裾を廻つてゐるあたりの小な潭になつた所に「6」鮠が澤山集まつてゐる。そして「7」よく見ると、「8」水の中に足に毛の生えた大な川蟹が石のやうに凝然としてゐるのを見つけた。夕方の「9」食事前に、よくこの路を歩いて來た。冷え／＼とした夕方、淋しい秋の山峽を小い清い流れについて行く時、考へる事は矢張り沈んだ事が多かつた。淋しい考へだつた。然し、それには静かない氣持がある。自分はよく怪我の事を考へた。一つ間違へば今頃は青山の土の下に仰向けになつて寝てゐる所だつた「10」などと思ふ。青い冷たい堅い顔をして、顔の傷も背中「11」傷も其儘で、祖父や母の屍骸が傍にある。それももうお互に何の交渉もなく、——こんな事が想ひ浮ぶ。それは淋しいが、それ程に自分を恐怖させない考へだつた。何時かはさうなる。それが何時か？——今迄はそんな事を思つて、その「何時か」を知らず知らず遠い先の事に「12」してゐた。然し今は、それが本統に何時か知れないやうな氣がして來た。自分は死ぬ筈だつたのを助かつた、何かが自分を殺さなかつた、自分には仕なければならぬ仕事があるのだ、——中學で習つた、ロード・クライヴと云ふ本に、クライヴがさう思ふ事によつて激勵される事が書いてあつた。實は自分もさういふ風に危かつた出來事を感じたかつた。そんな氣もした。然し妙に自分の心は静まつて了つた。自分の心には何かしら死に對する親みが起つてゐた。

自分の部屋は二階で、隣の、割りに静かな座敷だつた。讀み書きに疲れるとよく縁の椅子に出た。傍が玄關の屋根で、「13」それが家へ接續する所が羽目になつてゐる。「14」其羽目の中に蜂の巢があるらしい。虎斑の大な肥つた蜂が天氣さへよければ、朝から暮れ近くまで毎日忙しさに働いてゐた。蜂は羽目のあはひから摩抜けて出ると、一ト先づ玄關の屋根に下りた。其處で羽根や觸角を前

足や後足で丁寧^とに調へると、少し歩きまはる奴もあるが、直ぐ細長い羽根を兩方へしつかりと張つて、ぶーんと飛び立つ。飛び立つと急に早くなつて飛んで行く。植込みの八つ手の花が丁度咲きかけて蜂はそれに群つてゐた。自分は退屈すると、よく欄干から蜂の出入りを眺めてゐた。

或朝の事、自分は一疋の蜂が玄關の屋根で死んで居るのを見つけた。足を腹の下にびつたりとつけ、觸角はだらしなく顔へたれ下がつてゐた。他の蜂は「15」冷淡だつた。巢の出入りに忙しくその傍を這ひまはるが全く拘泥する「16」様子もなかつた。忙しく立働いてゐる蜂は如何にも生きてゐるものといふ感じを與へた。その傍に一疋、朝も晝も夕も見る度に一つ所に全く動かさずにうつつ向きにころがつてゐるのを見ると、それが又如何にも死んだものといふ感じを與へるのだ。それは三日程その儘になつてゐた。「17」それは見てゐて、如何にも静かな感じを與へた。淋しかつた。他の蜂が皆「18」巢に入つて仕舞つた日暮れ、冷たい瓦の上の一つ残つた屍骸を見る事は淋しかつた。然しそれは如何にも静かだつた。

「19」晩の間にひどい雨が降つた。朝は晴れ、木の葉も地面も屋根も綺麗に洗はれてゐた。蜂の屍骸はもう「20」其所にはなかつた。今も巢の蜂共は元氣に働いてゐるが、死んだ蜂は雨樋を傳つて地面へ流し出された事であらう。足はちぢめたまま、觸角は顔へこびりついたまま、多分泥にまみれて何所かで凝然としてゐる事だらう。外界にそれを動かす次の變化が起るまでは屍骸は凝然と其處にしてゐるだらう。それとも蟻に曳かれて行くか。それにしろそれは如何にも静かであつた。「21」忙しくて働いてばかりゐた蜂が全く動く事がなくなつたのだから静かである。「22」自分は其の静かさに親しみを感じた。自分は「范の犯罪」といふ短篇小説をその少し前に書いた。范といふ支那人が、過去の出來事だつた結婚前の妻と自分の友達だつた男との關係に對する嫉妬から、そして自身の生理的壓迫もそれを助長し、その妻を殺す事を書いた。それは范の氣持を主にして書いたが、然し今は范の妻の氣持を主にし、仕舞に殺されて墓の下にゐる、その「23」静さを自分は書きたいと思つた。「24」「殺されたる范の妻」を書かうと思つた。それはたうとう書かなかつたが、自分にはそんな要求が起つてゐた。其前から「25」かつてゐた長篇の主人公の考へとは、それは大變異つて了つた氣持だつたので弱つ

た。

蜂の屍骸が流され、自分の眼界から消えて間もない時だった。ある午前、自分は圓山川、それからその流れ出る「26」日本海の見える「27」東圓山公園へ行くつもりで宿を出た。「2」の湯の前から小川は往來の眞中をゆるやかに流れ、圓山川へ入る。或所迄來ると、橋だの岸だのに人が立つて何か川の中の物を見ながら騒いでゐた。それは大な鼠を「28」川へなげ込んだのを見てゐるのだ。鼠は一生懸命に泳いで逃げようとする。鼠には首の所に七寸許りの魚串がさし貫してあつた。頭の上に三寸程、咽喉の下に三寸程それが出てゐる。鼠は石垣へ「29」這ひ上らうとする。子供が二三人、四十位の車夫が一人、それへ石を投げる。却々當らない。カチツカチツと「30」石垣へ當つてハネ返つた。見物人は大聲で笑つた。鼠は石垣の間に漸く前足をかけた。「31」然し這入らうすると魚串が「32」つかへた。そして又水へ落ちる。鼠はどうかして助からうとしてゐる。顔の表情は「33」人間には「34」わからないが、動作の表情にそれが、一生懸命である事がよくわかつた。鼠は何所かへ逃げ込む事が出来れば助かると思つてゐるやうに、長い串をさされたまま、又川の眞中の方へ泳ぎ出した。子供や車夫は益々面白がつて石をなげた。脇の洗場の前で餌を漁つてゐた二三羽の家鴨が石が飛んで來るので吃驚し、首を延ばしてきよろ／＼とした。スポツ、スポツと石が水へ投込まれた。家鴨は頓狂な顔をして首を延ばしたまま、鳴きながら、忙しく足を動かして上流の方へ泳いで行つた。自分は鼠の最期を見る氣がしなかつた。鼠が殺されまいと、死ぬに極つた運命を擔ひながら、全力を盡して逃げ廻つてゐる様子が妙に頭についた。自分は淋しい嫌な氣特になつた。あれが本統なのだと思つた。自分が希つてゐる静かさの前に、ああいふ苦みのある事は恐い事だ。死後の静寂に親みを特つにしる、死に到達するまでのああいふ動騒は恐いと思つた。自殺を知らない動物はいよ／＼死に切るまではあの努力を續けなければならぬ。今自分にあつた「35」鼠のやうな事が起つたら自分はどうするだらう。自分は矢張り鼠と同じやうな努力をしまいか。自分は自分の怪我の場合、それに近い自分になつた事を思はないではゐられなかつた。自分は出来るだけの事をしようとした。自分は自身で病院をきめた。それへ行く方法を指定した。若し醫者が留守で、「36」行

つても直ぐに手術の用意が出来ないと困ると思つて電話を先にかけて貰ふ事などを頼んだ。半分意識を失つた状態で、一番大切な事だけによく「37」頭が働いた事は自分でも「38」後から不思議に思つた位である。しかも此傷が「39」致命的のものかどうかは自分の問題だった。然し、致命的のものかどうかを問題としながら、殆ど死の恐怖に襲はれなかつたのも自分では不思議であつた。「フエータルなものかどうか？醫者は何んといつてゐた？」かう側にゐた友に訊いた。

「40」「フエータルな傷ぢやないさうだ」かういはれた。かういはれると自分は然し急に元氣づいた。亢奮から自分は非常に快活になつた。フエータルなものだと若し聞いたら自分はどうかだつたらう。その自分は一寸想像出来ない。「41」自分は弱つたらう。然し普段考へてゐる程、死の恐怖に自分は襲はれなかつたらうといふ氣がする。そしてさういはれても尙、自分は助からうと思ひ、何かしら努力をしたらうといふ氣がする。それは鼠の場合と、さう變らないものだつたに相違ない。で、又それが今來たらどうかと思つて見て、猶且、餘り變らない自分であらうと思ふと「あるがまま」で、氣分で希ふ所が、さう實際に直ぐは影響はしないものに「42」相違ない。しかも兩方が本統で影響した場合は、それでよく、しない場合でも、それでいいのだと思つた。それは仕方のない事だ。

そんな事があつて、又暫くして、或夕方、町から小川に「43」沿つて一人「44」上へ歩いていつた。山陰線の隧道の前で線路を越すと道幅が狭くなつて路も急になる。「45」流れも同様急になつて、人家も全く見えなくなつた。もう歸らうと思ひながら、あの見える所までといふ風に角を一つ／＼先へ／＼と歩いて行つた。物が總て青白く、空氣の肌ざりも冷々として、物静さが却つて何となく自分をそは／＼とさせた。大な桑の木が路ばたにある。彼方の路へ差出した桑の枝で、或一つの葉だけがヒラ／＼ヒラ／＼、同じリズムで動いてゐる。風もなく流れの他は總て静寂の中にその葉だけがいつまでもヒラ／＼ヒラ／＼と忙しく動くのが見えた。自分は不思議に思つた。多少怖い氣もした。「46」自分は下へ行つて「47」暫くそれを見上げてゐた。すると風が吹いて來た。その動く葉は動かなくなつた。原因は知れた。何かでかういふ場合を自分はもつと「48」知つてゐると思つた。

だん／＼と薄暗くなつて来た。いつまで往つても、先の角はあつた。もうこ
 らで引きかへさうと思つた。自分は何気なく傍の流れを見た。向ふ側の斜めに水
 から出てゐる半疊敷程の石に、黒い「49」小さいものがゐる。蝶蜷だ。未だ濡れてゐて、
 それはいい色をしてゐた。頭を下に、傾斜から流れへ臨んで「50」凝然してゐた。
 體から滴れた水が、黒く乾いた石へ一寸程流れてゐる。自分はそれを何気なく踞
 んで見えてゐた。自分は先程蝶蜷は嫌でなくなつた。蜷蜷は多少好きだ。屋守は蟲
 の中でも最も嫌ひだ。蝶蜷は好きでも嫌ひでもない。十年程前に「51」蘆の湖で
 蝶蜷が宿屋の流し水の出る所に集まつてゐるのを見て、自分が蝶蜷だつたら堪ら
 ないといふ氣をよく起した。蝶蜷に若し生れ變つたら自分はどうするだらう、そ
 んな事を考へた。其頃蝶蜷を見るとそれが想ひ浮ぶので、蝶蜷を見る事を嫌つた。
 然しもうそんな事を考へなくなつてゐた。自分は踞んだまま、傍
 思つた。不器用にからだを振りながら歩く形が想はれた。自分は踞んだまま、傍
 の小鞠程の石を取り上げ、それを投げてやつた。自分は別に蝶蜷を狙はなかつた。
 狙つても逆も當らない程、狙つて投げる事の手な自分はそれが當る事などは全
 く考へなかつた。石はこつといつてから流れに落ちた。石の音と同時に蝶蜷は四
 寸程横へ飛んだやうに見えた。蝶蜷は尻尾を反らし、高く上げた。自分はどうし
 たのかしらと思つて見てゐた。最初石が當つたとは思はなかつた。蝶蜷の反らし
 た尾が自然に靜かに下りて来た。すると肘を張つたやうにして傾斜に堪へて「52」
 前についてゐた兩の前足の指が内へまくれ込むと、蝶蜷は力なく前へのめつて了
 つた。尾は全く石についた。もう動かない。蝶蜷は死んで了つた。自分は飛んだ
 事をしたと思つた。蟲を殺す事をよくする自分であるが、その氣が全くないの
 に殺して了つたのは自分に妙ないやな氣をさした。素より自分の仕た事ではあつ
 たが、如何にも偶然だつた。蝶蜷にとつては全く不意な死であつた。自分は暫く
 其處に踞んでゐた。蝶蜷と自分だけになつたやうな心持がして、蝶蜷の身に自分
 がなつて其心持を感じた。可愛想に思ふと同時に、生き物の淋しさを一緒に感じ
 た。自分は偶然に死ななかつた。蝶蜷は偶然に死んだ。自分は淋しい氣持になつ
 て、漸く足元の見える路を温泉宿の方に歸つて来た。遠く町端れの灯が見え出し
 た。死んだ蜂は「53」どうなつたか、其後の雨でもう土の下に入つて了つたらう。

あの鼠はどうしたらう。海へ流されて、今頃は其水ぶくれのした體を「54」塵芥
 と一緒に海岸へでも打あげられてゐる事だらう。そして死ななかつた自分は今か
 うして歩いてゐる。さう思つた。自分はそれに對し、感謝しなければ濟まぬやう
 な氣もした。然し實際喜びの感じは湧上つては來なかつた。生きてゐる事と死ん
 了つてゐる事と、それは兩極ではなかつた。それ程に差はないやうな氣がした。
 もうかなり暗かつた。視覚は遠い灯を感じるだけだつた。足の踏む感覺も視覚を
 離れて、如何にも不確だつた。只頭だけが勝手に働く。それが一層さういふ氣分
 に自分を「55」誘つて行つた。

三週間ゐて、自分は此處を去つた。それから、もう三年以上になる。自分は脊
 椎カリエスになるだけは助かつた。

二 注解

以下の「1」～「55」の注解は、本文中の波線部に付した番号に対応している。
 異同の推移が次章に掲出した八本文校異表に記載されている字句は、各注解の最
 後の（ ）内に校異表の通し番号を記入した。その際、段落の推移、文の推移、
 語句の推移を示した三つの校異表は、「段」、「文」、「語」と略した。たとえば、(↓
 語1)ならば、語句の推移を表す校異表の通し番号1のところを当該字句の推移
 が示されている。

なお、本稿に掲出した八本文校異表は、拙稿「志賀直哉『城の崎にて』の形成」
 で用いた主要八本文の校異表から二つの『映山紅』のいずれかで動きのあつた箇
 所^①を抜き出したものである。

八本文は次に示す通りである。以下、八本文のそれぞれを適宜この1～8の番
 号を用いて表すことにする。

- 1 『白樺』第8巻第5号(白樺発行所、大正6年5月) 掲載初出本文
- 2 『夜の光』(新潮社、大正7年1月) 所収本文
- 3 『寿々』(改造社、大正11年4月) 所収本文
- 4 『志賀直哉全集』第3巻(改造社、昭和13年2月) 所収本文
- 5 『映山紅』(草木屋出版部、昭和15年12月) 所収本文

6 『映山紅』（全国書房、昭和21年12月）所収本文

7 『志賀直哉全集』第2巻（岩波書店、昭和30年6月）所収本文

8 『志賀直哉全集』第3巻（岩波書店、平成11年2月）所収本文

[1] 城崎にて

初出の1以降、標題は「城の崎にて」であったが、5の『映山紅』Aで「城の崎にて」と動いている。注目すべき大きな修訂である。本文中には、「城崎温泉へ出掛けた」という用例があり、この時点で標題と本文の不一致に気づき、標題の旧表記を本文の新表記に合わせたのであろうか。

[2] 一人、

初出の1以降、「一人で但馬の城崎温泉へ出掛けた。」とあったが、5で「一人、」としたもので、続く6もそれを受け継いでいる。「一人、」とするこゝとで音の濁りが取れ、歯切れもよくなっている。本文中には「一人」の用例として他に「町から小川に沿って一人上へ歩いていった。」がある。（↓語1）

[3] 心配は要らない。

4では「心配は要らない、」であったが、5で「心配は要らない。」と読点を句点にしたもの。ただし、初出1から3までも句点であり、1・2・3「心配は要らない、」、4「心配は要らない、」、5・6「心配は要らない。」と推移する。むしろ、7と8は4と同じく「心配は要らない、」と読点である。（↓文1）

[4] よかつたのだ

それまで「気候もよかつたのだ」とあったところを5で「気候もよかつた」と変えたのだが、6ではそれに従わず、「気候もよかつたのだ」とそれ以前に形に戻している。5で新出させた異同を6でまた元に戻した例は少ない。（↓語2）

[5] 小さい

「ちぢぢぢ」と読む。1～3は「小さい」と表記されている。4で「小さい」

になり、5・6はそれに従っている。本文中には、「大な」、「小な」の用例もあり、統一されている。なお、4を承け、4の本文をそのまま写した

と思われる7と8であるが、この表記は「小さい」と改めている。

[6] 鮠が

2～4では「山女」。5で「鮠」となり、6にも受け継がれている。「城の崎にて」は作者志賀直哉の大正二年秋の体験に基づいて書かれているが、当初「山女」だと思ひ込んでいた川魚が実は「鮠」であることが後にわかったため、事実即して正したのであろう。現在の大溪川では放流された鮠が目立つが、よく見ると鮠も泳いでいる。なお、「山女」を含む一文は、1になく、2で挿入されたものである。もちろん7・8では依然として「山女」である。（↓語3）

[7] よく見ると

「6」と同じく2で挿入された一文に含まれ、2～4は「尚よく見ると」であった。5で「尚」が削られている。「尚よく見ると」では、それ以前にも凝視があったことになる。「よく見る」から「尚よく見る」へではなく、「見る」から「よく見る」への展開を表現したのであろう。（↓語4）

[8] 水の中に

5と6だけにあり、他の本文にはない。「足に毛の生えた大な川蟹が石のやうに凝然としてある……」と続く。「水の中に」を加えることにより、川底にいる蟹が透明な水の流れとともに提示されることとなった。（↓語5）

[9] 食事前に

5・6以外の本文では「食事前には」とあった。著者は助詞一つの出入れにも意を用いている。（↓語6）

[10] などと思ふ

5・6以外の本文では「など思ふ」となっている。「など思ふ」でも同じ意味で通じる場所であるが、「と」のない、少しぶつきらほうな言い方が気になったのか、最終的には後者を選択している。（↓語7）

[11] 傷も其儘で、

初出の1では「傷も其儘で。」とあり、句点であった。この場合、一つ前の文にある「寝てゐる」にかかることになる。2・5・6のように「傷も其儘で、」と読点であれば、後の「祖父や母の屍骸が傍にある」の「ある」にかかるだろう。いずれも顔や背中中に傷の残る自分の遺体が青山の墓地に埋められているところを想像したものであるが、後者はその脇に祖父と母の遺体があることが強調されることになる。いずれを採るべきかで揺れているが、最終的には後者を選んだということになる。(↓文2)

[12] してゐた

1以降、ずっと「知らず知らず遠い先の事にしてゐた」であったが、5で「知らず知らず遠い先の事に考へてゐた」と変わり、6でまた戻されている。このように5で取り入れた表現上のアイデアを6で吟味して撤回するといふことが少なくない。(↓語8)

[13] それ

1・2＝「これが」、3・4＝「それが」、5＝「これが」、6＝「それが」と揺れている。ここでも最終稿6は5を吟味してそれを承けていない。(↓語9)

[14] 其羽目の中に

5においてここから改行されることになるが、6でまた戻されている。5以外の本文では「其羽目の中に」での改行はない。5の時点ではとくに改行に積極的で、6箇所の新しい段落が生まれているが、そのうち5箇所は6でまた改行のない形に戻されている。7・8は、4が改行のない形であるのを単に写したものである。(↓段1)

[15] 冷淡だった

1～3は「一向冷淡だった」で、4で「一向に冷淡だった」と変わるが、5・6では「冷淡だった」だけとなる。(↓語10)

[16] 様子もなかつた

5と6でのみ「様子もなかつた」。他の本文はすべて「様子はなかつた」

である。ずっと「様子は」であったが、最後に「様子も」に変えている。(↓語11)

[17] それは見てあて、

[14]の「其羽目の中に」などと同じく5でのみここから改行されている。先行する他の本文には改行がなく、6ではこの改行は受け入れられていない。(↓段2)

[18] 巢に入つて

「巢に入つて」か「巢へ入つて」かで揺れている。1～3が「巢に入つて」、4では「巢へ入つて」と異同が生じ、5・6は1～3の「巢に入つて」を採っている。「に」か「へ」かの対立は、最終的に初出の「に」に還って決着している。(↓語12)

[19] 晩の間に

1～3が「晩の間に」で4で「夜の間に」と異同が生じ、5ではそれを承けているが、6はまた1～3の「晩の間に」を採っている。辞書的には同意の「晩」と「夜」であるが、やはり著者には語感あるいは意味上の相違があったのであろう(↓語13)

[20] 其所には

5・6でのみ「其所には」。他はすべて「其所に」。(↓語14)

[21] 忙しくてく

1～4は「忙しくてく」で、5で「忙しくてく」が新出。6でも5を承けているが、「て」は衍字であろう。(↓語15)

[22] 自分は其の静かさに

5で改行が生まれているが、他の本文では改行がない。6でも改行のない形が採られている。(↓段3)

[23] 静さを

本文中の他の部分では、「静かさ」、「静かな」、「静かに」、「静かである」と漢字の後に「か」を送っている。「静さを」とする「か」のない表記はこれの一例のみであり、整合性を欠いている。

[24] 「殺されたる范の妻」を

4ではここで改行され、短い段落ができています。前の段落とこの段落は内容的に繋がっており、この二文に切れ目を入れ、別々の段落に分けるのは、いかにも不自然である。また前にできた段落の最後の一文とこの段落の最初の一文とは、次に示すように、対句のような関係にもある。

……殺されて墓の下にゐる、その静さを自分は書きたいと思つた。「殺されたる范の妻」を書かうと思つた。(6による。)

1～2にはここで改行がなく、3ではこの二文が別の頁に分かれていて、その上、前頁の一文の句点がちやうど行末にあり、次頁の二文目が「殺されたる……」とカギから始まるため、改行の有無が判然としない。おそらく3を底本にした4はそれを改行とみたのではなからうか。しかし、それが誤りであるのは、上に述べたように改行することは不自然であり、また5の本文で改められて6がそれを継承しているからである。6では5での改行を厳しく吟味し、多くを元に戻しているが、この修正はそのまま継承している。なお、このことについては、注(1)に挙げた拙稿92頁～93頁に詳しく述べている。(↓段4)

[25] か、つてゐた

「其前からか、つてゐた」と「其前からか、つてゐる」の対立が生まれている。1～3と前者であり、4にいたって後者になつてゐるが、5と6はまた前者を採っている。句末は過去形と現在形にわかれるが、文法的にはどちらも可であろう。ちなみにこれを受ける「長篇」は後の「暗夜行路」である。(↓語16)

[26] 日本海の

1～4は「日本海などの」であった。東山公園から展望すると円山川の河口の向こうに山や半島に挟まれた日本海が少し見える。これを正確に写せば「日本海などの見える」であろうが、5において「など」を取り除き、「日本海」をクローズアップしてその鮮明度を増している。しかし、それでも読者には山も空も見ることができらるであろう。これは6でも踏襲されてい

る。(↓語17)

[27] 東園山公園へ

5と6では「東園山公園」となっているが、それまでの1～4にあるように「東山公園」が正しい。印刷工程で本文にある「圓山川」が混ざってしまったか。5での誤りを6でも見逃している。(↓語18)

[28] 川へ

5のみが「川の中へ」。5でこのように改めたものの、直前に「何か川の中の物を見ながら騒いでゐた」と「川の中」を含む一文がある。重なりを避けてもとに戻したもののか。(↓語19)

[29] 這ひ上らうと

「這ひ上らう」とした5の誤りを6で正したもの。1～4は「這ひ上らうと」。(↓語20)

[30] 石垣へ當つて

「石垣へ」と「石垣に」の対立が見える。1～3は前者、4で後者に直されるが、最終稿の6ではまた前者を選んでいる。(↓語21)

[31] 然し這入らうと

5の本文のみにある段落分け。5で新出した他の5箇所も段落分けと同じく、これも6で元の段落分けのない形に戻されている。(5で新出した段落分けは、1箇所のみ6に受け継がれている。)(↓段5)

[32] つかへた

1～4では「直ぐにつかへた」。5と6はこれを「つかへた」とする。(↓語22)

[33] 人間には

4だけが「人間に」で「は」がない。他はすべて「人間には」である。(↓語23)

[34] わからないが、

1～4は「わからなかつたが」。5で「わからないが」が新出し、6はそれを踏襲している。ここでも過去形と現在形が対立している。(↓語24)

[35] 鼠のやうな

5のみが「鼠やうな」。「鼠のやうな」の「の」の脱字である。6で改められている。(↓語25)

[36] 行つても直ぐに

1～4は「行つて直ぐに」。5と6で「も」が加わった。わかりやすく改めている。(↓語26)

[37] 頭が働いた

「頭が働いた」か「頭の働いた」という、「が」と「の」の助詞の対立。1・2が前者、3・4が後者、そして5・6ではまた前者が選ばれている。こうした修訂のジグザグ運動が間々見られる。(↓語27)

[38] 後から

「後からも」と「後から」の間で動いている。1と2が前者、3と4が後者で、5では前者に戻ったが、6はまた後者。迷った末に「後から」が選ばれたように見える。(↓語28)

[39] 致命的のものか

1～3は「致命的なものか」で4で「致命的なものか」となっている。5と6では、はじめの「致命的なものか」を採っている。ちなみに、この後は、「然し、致命的なものかどうかを問題としながら……」と続き、「致命的なものか」が出てくる。(↓語29)

[40] 「フェータルな傷ぢやないさうだ」

5の本文では、新しく6箇所で改行されているが、5箇所は6で元に戻されている。1箇所のみ受け入れられたわけだが、それがこの「フェータルな傷ぢやないさうだ」からの改行である。(↓段6)

[41] 自分は弱つたらう

5で新出した改行の一つ。これは他の5箇所同様、6で改められている。(↓段7)

[42] 相違ない。

1・2で「相違ない。」、3・4で「相違ない、」であるが、5・6では

1・2と同じ「相違ない。」となっている。通常は句点を要するところと思われる。(↓文3)

[43] 沿つて

1～4は「添ふて」。5と6で「沿つて」。(↓語30)

[44] 上へ

1～4は「段々上へ」で、5と6では「段々」をなくして「上へ」だけとされている。近接する次の段落の冒頭にも「だんく」とあるが、これと重なりを避け、後の「だんく」とを生かすために消去したのであろうか。(↓語31)

[45] 流れも同様

1～4では「流れも同様に」。5と6では「流れも同様」と「に」を省いている。「同様に」よりも「同様」の方が軽快で歯切れがよい。(↓語32)

[46] 自分は下へ行つて

1～4では、「自分は……」で始まるこの一文の前に「然し好奇心もあつた。」という一文が存在する。それが5でなくなり、6でもそれが踏襲されている。5での動きの是非を再度厳しく検討している6⁽³⁾が引き継いでいるところからすると、脱落ではなく一文は削除されたかとも思われるが、6には5で生じた誤りを訂正できていない例もある。ただ、この前に、次のように「自分は不思議に思つた。」というほぼ同意の一文が存在している点にも留意すべきであろう。

自分は不思議に思つた。多少怖い氣もした。然し好奇心もあつた。

同じような内容の叙述が一文を挟んで繰り返される停滞を避けたのであるうか。(↓文4)

[47] 暫くそれを

1～4は「それを暫く」である。5と6では「暫くそれを」。興味深い語句の入れ替えである。一文全体の口調から後者を選んだものと思われる。(↓語33)

[48] 知つてゐると思つた

1～4は「知つてゐたと思つた」。5と6では「知つてゐると思つた」。「25」、「34」と同じく過去形と現在形が対立している。(↓語35)

[49] 小さいものがゐる

1～3は「小さなものがゐた」、4では「小さいものがゐた」とあり、ここまでは時制は過去。5で「小さいものがゐる」と現在になつて迫真性を増し、6に引き継がれる。「25」、「34」、「48」参照。(↓語36)

[50] 凝然

「じつと」の表記は、本文の他の部分では、「凝然と」が二例ある。ここでは「と」を送らずルビに示している。整合性に欠けており、他に倣うのがよいであろう。

[51] 蘆の湖で

1～4は「よく芦ノ(蘆の)湖で」とある。5と6には「よく」がない。この一文は、

十年程前によく芦ノ湖でいもりが宿屋の流し水の出る所に集まつてゐるのを見て、自分がいもりだつたらたまらないといふ氣をよく起こした。

(1の本文)

とあり、最後にも「よく」が用いられている。一文中に「よく」が二度使われるのを避けたのであろうか。(↓語37)

[52] 前についてゐた

1～4では、「前へついてゐた」。5で「前についてゐた」と変わり、6に受け継がれている。

この部分を含む一文は、4の本文では、
すると肘を張つたやうにして傾斜に堪へて、前へついてゐた兩の前足の指が内へまくれ込むと、蠓蠓は力なく前へのめつて了つた。(ルビは省略した。)

とあり、1～4までは「前へ」が一文中に二度使われていた。これを回避するために、はじめの「前へ」を「前に」と改めたのであろう。(↓語38)

[53] どうなつたか、

1～4で「どうなつたか」とあつた句点が5で読点に改められ、6に引き継がれている。(↓文5)

[54] 塵芥と

1～3では「ごみくた」であつたが、4で「塵芥」となり、これが5にもルビのない「塵芥」だけが引き継がれるが、最終稿の6では「塵芥」に「ごみくた」とルビが付される。6における点晴はこのような細部にも及んでゐる。(↓語39)

[55] 誘つて行つた

1～2では「誘つても行つた」とあり、3・4は「誘つて行つた」と「も」がなくなる。5ではいったん1・2と同じ「誘つても行つた」に戻されるが、6では最終的にこれ採らず、3・4と同じ「誘つて行つた」を採つてゐる。「も」のあるなしで行きつ戻りつしている。(↓語40)

三 八本文校異表

「段落の推移」、「文の推移」、「語句の推移」に分けて、1～8の八本文校異表を次に掲出する。『映山紅』A・B(5・6)のいずれかで動きのあつた箇所のみ取り上げている。(具体的には、4～6の本文で表の数字に違いがある箇所となる。)

段落の推移

| No. | 頁・行 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 異同箇所 |
|-----|-----|-------------|---|---|---|---|---|---|---|-----------------|
| | | 其羽目の中に | 1 | 1 | 1 | ⑤ | 1 | 1 | 1 | 〔改行〕其羽目の中に |
| | | それは見てゐて、 | 1 | 1 | 1 | ⑤ | 1 | 1 | 1 | 〔改行〕それは見てゐて、 |
| | | 自分は其の静かさに | 1 | 1 | 1 | ⑤ | 1 | 1 | 1 | 〔改行〕自分は其の静かさに |
| | | 〔殺されたる范の妻〕を | 1 | 1 | ④ | 1 | 1 | 4 | 4 | 〔改行〕「殺されたる范の妻」を |

| No. | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 |
|------|------------|---------|---------|--------|------|-------|------|------|
| 頁・行 | 4・1 | 4・6 | 4・10 | 4・10 | 4・10 | 4・10 | 4・11 | 4・11 |
| 1 | 一人でよかつたのだ。 | ② | ② | ⑤ | ⑤ | ⑤ | ⑤ | ⑤ |
| 2 | 1 | 1 | 2 | 2 | 5 | 5 | 1 | 1 |
| 3 | 1 | 1 | 2 | 2 | 5 | 5 | 1 | 1 |
| 4 | 1 | 1 | 2 | 2 | 5 | 5 | 1 | 1 |
| 5 | ⑤ | ⑤ | ⑤ | ⑤ | ⑤ | ⑤ | ⑤ | ⑤ |
| 6 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 1 | 1 |
| 7 | 1 | 1 | 2 | 2 | 5 | 5 | 1 | 1 |
| 8 | 1 | 1 | 2 | 2 | 5 | 5 | 1 | 1 |
| 異同箇所 | 一人よかつた。 | ②山女が⑤鮠が | ②尚よく見ると | ⑤よく見ると | 水の中に | 食事前には | | |

語句の推移

| No. | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
|------|-------------------------|-----|-------|------------|---------|
| 頁・行 | 4・3 | 5・1 | 9・7 | 9・16 | 11・9 |
| 1 | 心配はいらない。傷も其儘で。 | ② | 相違ない。 | 然し好奇心もあつた。 | どうなつたか。 |
| 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 3 | 1 | 1 | ③ | 1 | 1 |
| 4 | ④ | 1 | 3 | 1 | 1 |
| 5 | 1 | 2 | 1 | ⑤ | ⑤ |
| 6 | 1 | 2 | 1 | 5 | 5 |
| 7 | 4 | 1 | 3 | 1 | 1 |
| 8 | 4 | 1 | 3 | 1 | 1 |
| 異同箇所 | 心配はいらない、傷も其儘で、相違ない、〔なし〕 | | | | どうなつたか、 |

文の推移

| No. | 5 | 6 | 7 |
|------|----------------|----------------------|--------------|
| 頁・行 | 7・13 | 8・16 | 9・3 |
| 1 | 然し這入らうとすると | 「フエータルな傷ぢやないさうだ」 | 自分は下へ行つて |
| 1 | 1 | 1 | 1 |
| 1 | 1 | 1 | 1 |
| 1 | ⑤ | ⑤ | ⑤ |
| 1 | 1 | 5 | 1 |
| 1 | 1 | 1 | 1 |
| 1 | 1 | 1 | 1 |
| 異同箇所 | 〔改行〕然し這入らうとすると | 〔改行〕「フエータルな傷ぢやないさうだ」 | 〔改行〕自分は下へ行つて |

| No. | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 |
|------|--------------|-----|-------------------|----------|-------|------|------|-------|--------|--------|-------|------|---------|--------|----------|------|----------|-------|---------|------|------|---------|------|------|-----|
| 頁・行 | 4・14 | 5・4 | 5・10 | 6・1 | 6・2 | 6・6 | 6・8 | 6・9 | 6・13 | 7・4 | 7・7 | 7・7 | 7・9 | 7・11 | 7・12 | 7・13 | 7・14 | 7・14 | 8・8 | 8・12 | 8・13 | 8・13 | 8・14 | 9・9 | 9・9 |
| 1 | など思ふ。 | これが | 一向冷淡だつた。 | 様子になかつた。 | 巢に入つて | 晩の間に | 其所に | 忙しく／＼ | かゝつてゐた | 日本海などの | 東山公園へ | 川へ | 這ひ上がらうと | 石垣へ當つて | 直ぐにつかへた。 | 人間には | わからなかつたが | 鼠のやうな | 行つて直ぐに | 頭が | 後からも | 致命的なものか | 添ふて | 段々上へ | |
| 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 1 | ③ | ③ | ④ | ④ | ④ | ④ | ④ | ④ | ④ | ④ | ④ | ④ | ④ | ④ | ④ | ④ | ④ | ④ | ④ | ④ | ④ | ④ | ④ | ④ | ④ |
| 1 | ⑤ | ⑤ | ⑤ | ⑤ | ⑤ | ⑤ | ⑤ | ⑤ | ⑤ | ⑤ | ⑤ | ⑤ | ⑤ | ⑤ | ⑤ | ⑤ | ⑤ | ⑤ | ⑤ | ⑤ | ⑤ | ⑤ | ⑤ | ⑤ | ⑤ |
| 1 | 5 | 3 | 1 | 5 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 1 | 1 | 3 | 1 | 4 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 1 | 1 | 3 | 1 | 4 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 異同箇所 | などと思ふ。考へてゐた。 | それが | ④一向に冷淡だつた。⑤冷淡だつた。 | 様子もなかつた。 | 巢へ入つて | 夜の間に | 其所には | 忙しく／＼ | かかつてゐる | 日本海 | 東山公園へ | 川の中へ | 這ひ上らうと | 石垣に當つて | つかへた。 | 人間には | わからないが | 鼠のやうな | 行つても直ぐに | 頭の | 後から | 致命的なものか | 沿つて | 上へ | |

| | | | | | | | | |
|----------|----------------------|---------|--------|------|-----------|--------|-------|--------|
| 40 | 39 | 38 | 37 | 36 | 35 | 34 | 33 | 32 |
| 11・15 | 11・10 | 11・2 | 10・8 | 10・5 | 10・2 | 10・1 | 9・16 | 9・10 |
| 誘つても行つた。 | ごみくた | 前へついてゐた | よく芦の湖で | ゐた。 | (小さなものが) | 知つてゐたと | 左うしたら | それを暫く |
| 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| ③ | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 3 | ④ | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 1 | 4 | ⑤ | ⑤ | ⑤ | ⑤ | ⑤ | ⑤ | ⑤ |
| 3 | 1 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 |
| 3 | 4 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 3 | 4 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 誘つて行つた。 | 塵芥 <small>ごみ</small> | 前についてゐた | 蘆の湖で | ゐる。 | (小さいものが)ゐ | 知つてゐると | 〔なし〕 | 暫くそれを |
| | | | | | | | | 流れも同様 |
| | | | | | | | | 流れも同様に |

四 異同箇所との継承と『映山紅』における修訂の特徴

二つの本文の類縁性は、先行する本文で新出した異同を後の本文が継承しているかどうかによって測ることができると。たとえば、これは別の拙稿⁹⁾に詳細を示しているが、「城の崎にて」の場合、2における語句の新出異同は34箇所を数える。この異同箇所は、3～6の本文には、順に33箇所、29箇所、27箇所、27箇所が継承されている。また3においても12箇所語句の異同が新出しているが、4～6の本文には、順に11箇所、6箇所、8箇所が継承されている。4でもまた同様である。ここでは、著者がこの九巻本全集編纂にあたって十分な見直しを行ったと自ら語つてもいるが¹⁰⁾、実に70箇所語句の異同が生まれ、5～6の本文には、66箇所、62箇所が受け継がれている。後統の本文が2の本文のもつ固有の血、3の本文のもつ固有の血、4の本文のもつ固有の血を承けつつ形成されている。

もちろん、異同箇所数が後統の本文でわずかに減少しているのは、本文の継承は単に機械的にすべてを写すことで成り立つわけではなく、写すと同時に写すかどうかとも吟味されていることを表している。したがって、写されないこともある。

直前の本文に対する異同には、次の三つの場合が考えられる。

(1)それまで異同のなかった箇所に対して生まれた異同(2以降の本文で発生する)。

(2)異同のある箇所を更新して生まれた異同(3以降の本文で発生する)。

(3)異同のある箇所を元に戻した異同(3以降の本文で発生する)。¹¹⁾

二つの『映山紅』における本文の動きをみると、『映山紅』Aの段落では(1)が6箇所、(3)が1箇所あり、文では(1)が2箇所、(3)が3箇所、語句では(1)は29箇所、(3)は8箇所ある。合わせると、(1)は37箇所、(3)は12箇所となり、異同の新出もあるが、一度動いた異同を元に戻したために生まれた異同が全体のおよそ四分の一を占めている。

『映山紅』Bでは、(3)は段落で5箇所、語句で11箇所ある。合わせると、新出異同の(1)も(2)もなく、動きのみえる16箇所はすべて、誤りの訂正(語句20、25)も含め、一度動かし了字句を元に戻すことで生まれた(3)の動きである。これまでの本文のように異同の新出する激しさはなく、この最終稿において静かに終着点に到達した感がある。

また二つの『映山紅』における語句の異同には、助詞一字を対象とした修訂が実に14箇所含まれている。具体的にいえば、「食事前には」を「食事前に」とし、「なご思ふ」を「なごと思ふ」とするような助詞一字の有無による異同が8箇所(6、7、14、23、26、28、32、40)、「様子はなかつた」を「様子もなかつた」とし、「巢に入つて」を「巢へ入つて」とするような助詞一字の交替による異同が6箇所(11、12、21、27、29、38)もある。『映山紅』における著者の修訂は、全体にわたって驚くほど細部にまで及んでいるのがわかる。

これらはすべて『映山紅』における修訂の実例であり、志賀直哉における本文形成の一面である。(小説の神様)のこだわりと迷いが明らかにここにはある。

おわりに

「城の崎にて」の初出は、大正六年五月の『白樺』誌上であった。その二十九年後となる昭和二十一年十二月、「城の崎にて」は全国書房版『映山紅』所収「城崎にて」において少なくとも五度目の、そして最後の修訂が行われたと考えられる。

前章で新出異同の推移に触れたが、その軌跡をたどれば、著者は最終稿の「城崎にて」に向かって「城の崎にて」を形成しているのがよくわかる。それは、もとより著者の意による本文の変容であるが、「城の崎にて」という本文そのものが、昭和二十一年の「城崎にて」に向かって歩を進めているようにも見える。

「城の崎にて」の「もつとも信頼さるべき本文(テキスト)」⁽¹²⁾の底本とすべきは、この「城崎にて」を措いてほかにあるまい。定本「城の崎にて」は、明らかな誤りなどを除き、全国書房版『映山紅』所収「城崎にて」をもとに作成されるべきである。

「暗夜行路」が大正十年一月の発表開始から完成まで実に十六年余りを要しており、その著者である志賀直哉は「作品として結実する前の執拗な営み」⁽¹³⁾がとくに注目される。そのためでもあろう、その作品の形成については、「一旦活字になったものの手直し、変更はきわめて少なかったのではないか」との推測が生まれ、「作品」は見事に不動なのである」と断じられることさえある⁽¹⁴⁾。

しかし、それは明らかに誤りである。「一旦活字になったもの」も、この著者によって一字一句に至るまで修訂の組上に上せられ、吟味されている。そして、改められている。決して不動ではなく、むしろ激しく動いているのである。そして、そのようにしてようやく『映山紅』B所収「城崎にて」において「城の崎にて」が完成するのであるから、むしろ『映山紅』B所収の「城崎にて」にいたる、「城の崎にて」がはじめて活字となって以降の二十九年間こそ、「作品として結実する前の執拗な営み」であったというべきかもしれない。

二つの『映山紅』所収「城崎にて」は、知られざる「城の崎にて」であった。ここには志賀直哉の本文形成における細心で執拗な彫心鏤骨の姿勢が見える。(小説の神様)の本文形成の実相も、この知られざる「城の崎にて」に多く隠されていたのである。

注

(1) 本文の推移についての詳細は、拙稿「志賀直哉「城の崎にて」の形成―「城の崎にて」

から「城崎にて」へ」(『尾道大学芸術文化学部紀要』第10号、平成23年3月)参照。
(2) 現行全集の各巻の後記に凡例として、

本全集本文は、昭和五十八年(一九八三)年四月から翌年七月にかけて小社が刊行した第二次菊判全集(全一五巻。昭和三十(一九五五)年小社刊行の新書判全集を底本として作成)を底本とした。

とあり、現行全集の本文は、新書判全集を底本の底本として示されている。新書判全集には底本に関する記述がない。

(3) 漢字字体の新旧、漢字・仮名の別、送りがな、ルビの有無といった表記の違いを除けば、字句は完全に一致している。(1)に挙げた拙稿において、九巻本全集所収の「城の崎にて」本文を4とし、現行全集所収の「城の崎にて」本文を8として、本文番号で表した両者の異同の状況が完全に一致していることを示している。

(4) 漢字の新旧、仮名遣い、ルビに関しても、また明らかな誤植も含めて、元の本文(『映山紅』B)を復元している。

(5) 『映山紅』AまたはBでの新出異同のほか、『映山紅』AまたはBで先行する本文の字句に戻った場合も含む。ただし、漢字の新旧や漢字・仮名の別、仮名遣いなどの表記については、標題を除き、校異の対象としない。たとえば、「醫者」と「医者」、「小さい」と「小さい」、「凝然」と「凝然」などは異同なしとした。

(6) (1)に示した拙稿参照。

(7) (5)に同じ。

(8) たとえば、段落の異同では、5において新しく生まれた6箇所の段落は、6において1箇所を除いてすべて元に、つまり段落のない状態に戻されている。

(9) (1)に示した拙稿参照。

(10) 志賀直哉「全集完了」(『志賀直哉全集』(改造社版九巻本全集)第8巻付録「志賀直哉全集月報」第9号掲載、昭和13年6月)

(11) 4以降の本文では、異同の生じた形態に戻ることもありうる。たとえば、語句では、2〜6において、「1③313」と動く例が9、28、40の3箇所にみられる。

(12) 重松泰雄「本文批評の方法」(別冊國文學「レポート・論文必携」所収、昭和58年10月)

(13) 紅野敏郎「志賀直吉」(『朝日新聞』、昭和61年12月5日付)

(14) 高橋英夫「草稿暗夜行路」跋渉の夢(『志賀直哉全集』補巻5(月報5)、平成14年2月)